
レンタルボディ

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レンタルボディ

【Nコード】

N4609C

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

主人公・糸色望の下に、先日事故で失った筈の彼女が自宅の冷蔵庫から出て来た！
更新不定期

++プロローグ++

此処は遙か上空に位置する天界。少女はとある店の中にいた。そこはレンタルボディシヨップと言い、地上に降りる為の肉体を有料で貸し出している店である。

「オジサン、頼んでおいた体出来てる？」

少女はレジの前にいるオジサンにそう聞いた。オジサンは笑みを浮かべ、

「ああ、出来てるよ。御注文通り頭から足の爪の先つぽまで再現してあるよ。製造費は1,000万ソウルね」

ソウルと言うのは、天界で使うお金の単位である。

「高いよオジサン」

「何を言ってるんだい？オジサンはね、外見だけでは無く内部も正確に再現してるんだよ？1,000万ソウルは妥当な値段だと思うがね」

「解った。払えば良いんでしょ？」

少女はそう言って、懐からカードを取り出した。オジサンは受け取ると、読み取り機らしき物にカードを差し込み、レジを操作して金額を引く。因みに、1ソウルは100円である。

「はい」

と、カードを返すオジサン。少女は受け取ると、懐をへしまった。

「じゃあ一寸だけ待っててね」

オジサンはそう言うと、店の奥の方へと入って行き、大きな箱を持って来た。その中には、少女に瓜二つの肉体が入っていた。

「オジサン、服は？」

「別料金に為ります」

「じゃあ良いよ。現世で買うから」

少女はそう言って、オジサンが蓋を開けた箱の中の体に重なった。「所でお嬢ちゃんは今世に何をしに行くんだい？」

「彼に会いに行くのよ」
少女はそう言って店を跡にした。

1 日目

俺の名は糸色^{いとこね} 望^{のぞ}。至って普通の高校生。

その俺は、先日、付き合っていた彼女を事故で失った。交通事故だ。どうやら、自分の命と引き替えに、俺を救ってくれたらしい。そして今日は、その彼女の葬式である。

「南無妙法蓮華経・・・」

と、お坊さんがお経を唱える中、俺達参列者はお焼香をする。そして後はお坊さんの長い長いお経を聞くだけ。正直、そんな面倒な出たくない俺であったが、生前彼女が、『もし自分が死んだら必ず出る』と言っていたので、俺はこうやって参加する事にしたのだ。

お経を唱え終えたお坊さんは、俺達に一言挨拶をして去って行った。その後、式場スタッフ何かを言った様な気がするが、説明するのも正直面倒だ。

「では、本日はこれにて解散して頂き、翌日改めて火葬の方を行います」

式場スタッフはそう言って去っていった。辺りの参列者は全員涙を流していた。

葬式が終わって帰宅した俺は、涙で失った水分を補給しようと冷蔵庫を開けた。すると中がピカーツと光って一人の少女が出て来た。

「痛！」

俺は中から出て来た少女とぶつかって尻餅を着いた。

「ただいまっ、帰って来たよ望くん！」

少女は俺にそう言って抱き付いて来た。良く見るとこの少女は先程挙げた式の主演。あの日失った俺の彼女だった。否、そっくりなだけなのかも知れない。

「今何処から、ってか誰？」

「嫌だなあ、忘れちゃったの？私だよ」

そう言っつて少女は俺に顔を見せた。俺は吃驚仰天。開いた口がふさがらない。

「思い出した？」

俺は首を振った。縦にだ。

「楓・・・柊沢ひこうけ楓むぎだよな？」

「そうだよ。私は望くんと会う為にあの世から帰っつて来たのです」
「そんなバカな！？死んだ人間が蘇る筈無い！これは屹度夢だ！そ
うに違いない！」

俺は確かめるべく、自分の頬を抓った。痛い、と言う事は夢じゃない。

「で、何処から出て来たか、だったよね？冷蔵庫」

「そうか、解ったぞ。こいつはあれだ！幽霊つて奴だ！」

「お前、楓の幽霊か？」

「違うよ、何言っつてるの？幽霊な訳無いじゃん。だつてほら、ちゃんと肉体が・・・あ！」

「どうやら楓は気付いたらしい。自分が裸である事に。しかも今頃、
「見ないでエッチ！」

楓はそう言っつて、俺をぶん殴った。それによつて吹っ飛んだ俺は壁にめり込んだ。幽霊じゃない・・・。

「あ、ゴメン望くん。つい癖で殴っちゃった」

と、舌を出して苦笑する楓。

「どうでも良いが、どうやって蘇った？」

「蘇った、とは一寸違うかな？」

俺はその言葉に疑問符を浮かべた。

「あのね、この体は借り物なの。天界・・・つまりあの世にはね、
現世に降りる為の仮の肉体を貸してくれるお店があつて、そこで借りたの」

「成る程。じゃあ説明が終わつた所で俺を降ろしてくれ」

「あ、忘れてた！」

楓は口元に手を当てながら言い、

「よいしょ」

と、壁にめり込んだ俺を引っ張り出した。途端、楓は俺の下敷きになってしまった。

「何とかは死ななきゃ治らないと言っらしいが、治って無えな」

「無防備な女の子襲うな！」

楓は俺を思いつ切り蹴り上げ、落下する俺を避けた。その為俺はダントツと床に叩き付けられた。

「ゴメン望くん！」

またあの悪い癖か？言い忘れていたが、こいつには裸を見られると直ぐに暴力を振るう悪い癖がある。しかも生前より酷く為っていやがる。

「それにしても望くんタフだね。尊敬しちゃうよ」

「そりゃどうも。それより俺の貸してやるから2階行って服でも着て来い」

「うん、解った。服来て来るね」

楓はそう言って部屋を出て行った。

2日目（前編）

楓があのお世から降りて来て2日目。今日も俺は楓の暴力嵐に遭っていた。

「人が風呂入ってるのに覗かないでよ！」

楓の叫び声の後、俺は洗面所から爆音と共に吹っ飛んだ。

「痛！」

俺は壁に背中をたたき付け、廊下に座り込む。

「全く、毎度毎度望くんは！」

と、物凄い剣幕で拳をポキポキ鳴らしながら俺に近付いて来る楓。やばいよ俺！こんな彼女いてよく今まで生きて来れたな。って関心してる場合じゃねえっつーの！

「望くん、お願いだからジツとしててくれる？」

楓はそう言っただけの胸倉を掴んで持ち上げた。

「落ちて着け楓！あれは事故なんだ！」

「問答無用！」

楓は拳を俺の腹に叩き込んだ。ドンツと鈍い音が家中に響いた。

「がはっ！」

吐血する俺。

「今日と言っ今日は絶対許さないんだからね！」

と、楓は再び拳をぶち込んだ。

「がはっ！」

再び吐血。そして三度、四度と幾度と無く楓の暴力は続いた。

「もうやめてくれ楓！」

「後100回！」

「何〜！」

ドンー

「がはっ！」

ドンー

「がはっ！」

クソッ、楓目！何で戻って来たんだよ！？これじゃあ俺の命がい
くつ有っても足りねえよ！

「望くん、よく頑張ったね。後残り5回だよ」

ふっ、後5回。もうそっうんなに喰らってたか。

「99！」

ドン！

「99・1！」

嘘！？

「99・2！」

ドン！

「99・3！」

ドン！

「99・4！」

ドン！

「99・5！」

ドン！

「99・6！」

ドン！

「99・7！」

ドン！

「99・8！」

ふっ、もう直ぐこれも終わる！。

「99・9！」

ドン！

「トドメの1000よ！」

楓は今までのよりビッグな拳をプレゼントしてくれた。

「がはっ！」

俺は吐血と共に白眼に成ってしまった。

「仕方ない、これくらいで許してあげるか」

楓はそう言っつて、額の汗を腕で拭つた。こいつ、まだやるつもりだったのか……。

「それにしても、望くんつてホントにタフだよ。常人だったらトツクに死んでるよ?」

「何年お前に鍛えられてると思ってるんだ?」

と、俺は苦笑しながら楓を見た。

「望くん、また見たね?」

「わっ、悪い!今のはその!てか服着てないお前が悪い!それと殴るのはもう無しだ!」

「しょうがないわね。今回だけよ?」

楓はそう言っつて俺を放した。全く、楓の癖にも困つた物だ。

「あ、そうだ。望くん、今日は忌引になってるよね?火葬は放つておいて、私とデートしない?」

「それは構わないが、服を着てくれ」

途端、楓の回し蹴りが炸裂。俺は宙に舞い、廊下に叩き付けられた。

「あつ、ゴメン望くん!」

「オーケー、俺は心が広いから許す」

とは言っつたが、内心はぶちギレていた。

「服着るから覗かないでよ?」

楓は洗面所に入って服を着て俺の前に再び現れた。

「望くん、行こう?遊びに」

「駄目だよ楓。火葬行かないで遊んでるのが見付かったら先生に怒鳴られる」

「望くん、先生怖いの?」

「否、楓の方が怖い」

「だよな?じゃあ遊びに行こう?」

う……怖くて逆らえん。俺は仕方なく彼女の言うなりになるしか無かつた。

「解りました!で、何処へ行こうってんだ?」

俺は楓に苛付きながら訊ねた。

「うーん、何処にしようか？」

「言い出しつぺだろっ、ささっつと決めろ！」

「この間のデートの続きは？ほら、私が死んだあの日、まだ行く所あつたでしょ？」

その言葉に俺はあの日の事を思い出した。あの日は確か、遊園地行って、帰りに予約した高級料理店に行く予定だった。だが、料理店に行く前に楓が轢死したんだよなあ。

「あの後行こうとした所はやめよう。その代わりに、楓が行きたい所連れて行ってやる」

「群馬サファリパーク」

「待て、お前の事だからどうせライオンとかいる所を歩こうとしても言うつもりだろ？それだけは勘弁だ」

「何で！？面白そうなのに」

「俺が死ぬから駄目なんだ！他の所にしろ！」

「他の所？無いわね。望くんに任せるよ」

「温泉」

「望くん？どうせ君の事だから、私の裸見ようと混浴連れて行く気でしょ？」

「凶星だ。何て答えようか？」

「何だ、嫌なのか？」

「べ、別に良いんだよ？望くんが木偶の坊になってくれるんだつた」

「それは勘弁」

「じゃあ他ににして」

「プール、これなら裸になる必要無いだろう」

「水着無いけど？」

「スク水で良くねえ？」

「死人が家に帰れると思う？」

「だよなあ」

俺は考えた。今日1日、楓と楽しくする方法・・・あるじゃねえか！

「なら楓、映画に行こう。お前が観たいって言ってた映画見せてやるよ」

「あ、それ良いわね。行こう行こう！」

楓は喜び、はしゃぎだした。俺はすつくと立ち上がり、出掛ける準備をすると、二人で家を出た。

2日目(前編) (後書き)

こんな彼女いたらガクガクブルブルですな。けど、ボディガードには欲しいかも

2日目（後編）

映画館に到着すると、楓が観たがっていた実写版トラ スフォー
ーのチケットを俺は購入した。席は最後列の真ん中。しかも隣同
士だ。

「お時間は10:30からになっていますので遅れない様お願い致
します」

受け付けのスタッフはそう言ってチケットを2枚渡した。現在1
0:00ジャスト。俺は傍らに設けられた席に座った。隣には楓が
座っている。

「望くん、開演何時から？」

「10:30」

そう言っただけ俺は携帯を取り出し、メールを開いた。

「楓、どうしたら良いかな？」

と、楓に画面を見せる俺。メッセージには後輩からの恋文が書か
れている。

「付き合っつ？」

「迷ってる。けど、お前が帰って来たんじゃ、断らないとな」

「何で断るの？言っとくけど私がいられるの1週間だけだからね」

「どう言う事だ？」

「この体ね、1週間したら返さなきゃいけないの。だからね、望く
んとは日曜日までしか一緒にいられないの」

「あの世に戻るって事か！？嫌だよ俺そんなの！折角会えたっての
に、また俺の前からいなくなるってのかよ！？」

「私も出来る事ならずっといたいよ？でも、決まりだから」

10:30。開演時間に成った。

「あ、始まるから入ろう？」

「う、うん・・・」

俺は席を立ち、チケットをスタッフに見せて上映室に入った。

上映時間は2時間。終了後、俺達は映画館を跡にし、近くの公園に向かった。

公園内は広く、平日の為か子どももの姿は見られない。俺達はそんな公園のベンチに腰掛けた。

「俺、楓と離れたくない。掟とか破れないのか？」

「無理。けど、方法が無い訳じゃないよ」

「えっ・・・どんな方法だ？」

「望くんが天界に来れば良いんだよ」

「それって俺が死ななきゃいけないんだろ？嫌だよ、それだけは」

「じゃあ無理」

「・・・」

「そんな気にする事無いつて。一週間、一週間あるんだよ？」

「それで慰めのつもりか？」

俺はそう言っただけでベンチを離れた。楓はまだ座っている。

「帰る」

俺は楓にそう言い残し、帰宅した。

3日目

3日目。俺は学校に登校した。それはまだ良い。問題は、楓と一緒に登校して来ていると言う事だ。幸い、クラスメートは楓の事をただの転校生だと思っていた。

俺が窓際の最後列に座っていると、背丈が俺と同じくらいで特徴と言う特徴が殆ど無い男が声を掛けて来た。

「糸色、この娘は誰だあ？」

と、俺の隣に座っている楓の事を聞くのは、齊藤さいとう 孝幸だ。こいつは以前、楓に告白する直前に振られた男である。

「これですが何か？」

俺はそう言つて、孝幸に小指を突き立てて見せた。

「何、お前楓ちゃんが死んだつてのにもう作つたのかよ!？」

「否、こいつは楓だ」

刹那、楓が俺の足を踏み潰した。俺は痛いのを我慢して、「じゃなかった、楓の双子の妹だ。今日転校して来たんだ」

と、慌てて言い直した。

「齊藤 孝幸です。以後、お見知りおきを」

と、楓に握手を求める孝幸。

「ふん」

楓は孝幸の手を振り払い、そっぽを向いた。どうやら彼には興味を示さない様だ。

「何こいつ？楓ちゃんと全く同じ事しやがった」

「残念だったな孝幸、気に入って貰えんで」

「五月蠅え！そう言うお前はどうかなんだよ!？」

「望くん、この目障りな奴何処か連れてって」

楓がそう言いつと、孝幸はシヨックを受けて去って行った。

「楓、今のは酷いんじゃないか？」

俺は小声でそう言った。

「私は望くん以外興味無いから」

と、振り向いて微笑む楓。その表情が、とても可愛い。

「俺はお前以外にも興味あるぞ?」

「駄目だよ望くん。私以外に興味持っちゃ」

「要するに、他の奴好きに為っちゃ駄目って事だよな?」

「駄目。為ったら殺るよ?」

と、微笑を崩さず言う楓。その顔で言うのはやめて欲しい。マジで怖い。

午前の授業が終わって昼休み。俺は購買へ足を運んだ。此処で売ってる牛丼はとても美味しい。だが、今日はその牛丼が売り切れてしまっていた。

俺がどうしようかと思っていると、楓が牛丼の箱を2つ持って現れた。

「望くん、牛丼譲って貰ったから一緒に食べよう?」

「ああ。てか譲って貰ったって誰に?」

「3年の松下」

3年の松下と言えば校内では学校一の不良で直ぐに暴力を振るうと言う事で評判だ。そんな奴から、楓は牛丼を奪って来たらしい。

「どうやって譲って貰ったんだ?」

「丁度3つ持ってたから喧嘩売って叩きのめして2つ奪って来た」

「手加減、したよな?」

「そりやるに決まってるでしょ。だって手加減しなきゃ死んじやうもん」

「後で謝っとけよ?」

「面倒だから嫌。じゃ、私先に屋上行ってるね」

楓はそう言って去って行った。

「一寸待てよ」

と言う俺を無視して……。

「先輩」

と、やって来たのは、1年の白川しらかわ 聡美。白川は俺のパシリで、メールで恋文を打って来た奴だ。彼女は若干、楓にそっくりでよく見ないと間違えてしまう。

「さっき話してた娘、お亡くなりになられた柊沢先輩にそっくりでしたけど？」

「楓本人だ」

「先輩、死んだ人間は蘇りませんよ？」

「帰れ。教室に」

俺はそう言い放ち、屋上へ向かった。

「先輩、待って下さい」

と、白川が追って来る。だが俺は無視を続けつつ、屋上に辿り着いた。

「先輩、私を無視するなんて酷いです」

白川が何か言ってるが、俺は気にせず辺りを見回した。

「望くん、此处」

と、右の方で楓が手招きしている。俺はそっちに向き、徐に歩いて行った。

「遅いよ望くん。その娘は？」

「悪い。こいつは俺のパシリだ」

「白川 聡美です」

「聡美・・・そう言えば望くんのメールの恋文も聡美だったよね・・・」

「それこいつ」

と、白川を指差す俺。楓は白川に眼を飛ばした。

「先輩、怖いです」

「気にするな白川。こいつは俺に好意を持ってる奴には必ず眼を飛ばすんだ」

「成る程。このお方と私はライバル、と言う事ですか」

白川はそう言うと、楓に向かって眼を飛ばした。御互いの眼から

黄色の細い線が飛び出し、バチバチと火花を散らす。

「こんな所にいたか。捜したぞ？」

と、そこへ現れたのは、如何程、不良と言う雰囲気醸し出した男・・・3年の松下である。

「そこのお前、さつきはよくもやってくれたな」

松下は楓を睨み付けながら近付いて来る。

「やっぱ仕返に来ちゃった」

楓は食べ掛けの牛丼を置き、松下に歩み寄って行く。

「牛丼を返して貰おうか」

「私に勝てたら返してあげても良いけど？」

「生意気な女目！」

松下は楓の顔面目掛けて拳を突き出した。が、楓はスツとしゃがみ、足払いを掛けた。

「うお？」

刹那、松下は引っくり返った。

「はい、私の勝ち」

楓はそう言っつて、松下の頭に足を乗せた。

「トドメ、刺して良い？」

待て待て、何をする気だ楓？ま、まさか頭踏み潰すんじゃないやあるまいな？

「返事が無いって事は、トドメ刺して欲しいって事だよね？」

「止せ！」

俺は叫んだ。

「大丈夫だよ、殺しやしないから」

「そう言う問題じゃねえ！」

つて、聞いてねえし・・・。

「さて松下、何か言う事は？」

呼び捨てだー！

「その汚い足を退ける」

ピキッ！ 楓の額に怒りマーク出現。

「死ね！」

楓は足を軽く上げ、思いつ切り降ろした。コンクリに頭を叩き付けられた松下は、白眼を剥いて気絶した。

「可哀想、松下先輩・・・」

と、白川。

「やり過ぎだぞお前」

「松下が悪いんだもん」

楓はそう言つて、元の場所に戻つて食べ掛けの牛丼を手に取り、食べ始めた。

「望くん、食べないと時間が」

そうだった。俺は慌てて牛丼を取り、完食した。

「さて、教室戻るか」

そう言つて俺が教室へ戻ろうとすると、楓が俺の裾を掴んだ。

「やっぱサボろう」

「な、何言つてんだよ？」

「良いから良いから、座つて？」

楓がそう言うので、俺は仕方なく座つた。白川はいつの間にかいなくなっている。

「そう言えば、望くんと初めて逢つたのって、此処だったよね」

「ああ、そうだったな」

「私達、付き合い始めてもう一年になるんだね」

「そうだな。きっかけは『私の彼氏になりなさい』って命令だった。で、命令に背いたら半殺しにされたっけな」

途端、俺は震えた。

「思い出してみると物凄く怖い・・・」

「でもさ、私のお陰だよ？望くんがいじめられなくなったのは」

「そう言えばお前、俺をいじめっ子から救ってくれたな。確か、楓と逢つた次の日の放課後、俺がクラスメートの何人かに教室でいじめられてて、俺に会いに来たお前がいじめっ子を問答無用で叩きのめしたんだよな。それ以来いじめは無くなって・・・」

「でもさ、私がいなくなったら、またいじめられるんじゃない？」

「じゃあ逝くなよ」

「ごめん、それだけは出来ないの」

「また借りれば良いんじゃないの？」

「無理だよ！いくらすると思ってるの！？」

「えっ、金掛かるの？」

「1,000万ソウル」

「って、いくら？」

「1ソウル100円」

「そ、そんなにすんの！？」

俺は驚きのあまり眼球が飛び出した。

「だからね、次来れるのは何時になるか・・・」

「そうか・・・」

俺は肩を落とした。

それから暫くして、授業終了のチャイムが鳴った。

「授業、終わったな」

「そうだね」

「じゃ、帰ろうか」

「うん」

俺達は屋上を跡にし、教室に戻った。すると、

「お、戻って来たな」

と、俺を待っていたのか、孝幸が声を掛けて来た。

「何だよ？」

「あのさ、お前嘔吐いたろ？」

「何の話した？」

「楓ちゃんの双子の妹の件。さっき確認したんだが、楓ちゃんは一人っ子だよ」

「家に掛けたのか？」

「まあな」

「掛けてんじゃないよ、死ね」

と、孝幸の横を通り過ぎながら言う楓。相当嫌われている様だ。一体何があつたのだろう？「孝幸、楓に嫌われていた様だが、生前のあいつと何かあつたのか？」

「小学校の時に車の前に突き飛ばされたのよ」

そう言う楓に対し、孝幸は振り向き、

「なっ、何故知ってる!？」

楓は慌てて口を手で塞いだ。

「成る程、だから嫌われてたのか。で、その後どうなったんだ？」

「撥ねられた。意識不明の重体で病院に運ばれた」

それを聞いた俺は、孝幸をぶっ飛ばした。

「ちよっ、こつち飛ばさないで！」

と、楓が飛来する孝幸に回し蹴りを放つ。孝幸は黒板に向かって吹っ飛び、教卓に突っ込んだ。

「な、何で俺がこんな目に・・・？」

「楓の恨み」

と、俺。

「ちよっと良いかな、望くん」

「何？」

「今さ、殴って吹っ飛んだよね？何で？」

「そう言えば吹っ飛んだ。何でだ？」

「望くん、一寸私の事思いつ切り殴ってみて？」

そう言う俺の下に来る楓。

「何で？」

「良いから」

と、真剣な表情になる楓。

「何処を殴れば良い？」

「殴り易い所で良いよ。あっ、待った。廊下の方が良いかも」

そう言う廊下に出る楓に続いて出る俺。

「思いつ切り行くよ？」

俺はそう言うて、思いつ切りぶん殴った。

「嘘!？」

俺は驚いた。何故なら、楓が隣のクラスの入り口付近まで飛んだからだ。

「望くん、お目出度う」

俺は疑問符を浮かべた。

「望くんは、私との修行で強くなりました。これで、私がいなくても、いじめられないよ」

「修行なんてした覚え・・・」

「ある、と言うか無理矢理教え込んだじゃない。私が死ぬ少し前に」「そう言われれば、鍛えられた気がする・・・」

「これでまともに喧嘩出来るね」

「したくない」

「しようよ、喧嘩」

「じゃあその気にさせてあげる!」

次の瞬間、楓は目にも留まらぬ速度で俺の背後に回り込んだ。

「させるか!」

俺はすかさず前に飛び退いて構えた。

「楓、マジでやるつもりか?俺じゃお前に敵わない事くらい知ってるんだろ?」

「望くんなら大丈夫だよ。先刻孝幸あいつぶつ飛ばせたんだから」

「仮にそうだとしても楓と喧嘩なんて出来ない」

楓は肩を落として溜め息を吐いた。

「そう?あくまで平和主義?」

そう言った後、楓は少し間を置き、

「面白くないから帰る」

そう言っ一人で帰って行った。俺にはあいつが何を考えているのか全然解らん。

俺は教室に入り、帰り支度をして帰宅した。

家に入ると俺は、

「ただいまあ」

すると楓がすっ飛んで来て俺に抱きついた。

「お帰り、望くん」

何だこの感じは・・・？こいつノーブラ？

俺は頬が赤く成った。

「あっ！」

どうやら楓も気付いたらしく、頬を赤くした。

「の、の、望くん？顔が赤く成ってるよ？」

楓は顔を引き攣らせながら言った。

「ストップ楓！抑えるんだ！」

だが、楓は俺の言葉を無視して背負い投げをした。

ダンッ！ 俺は背中を廊下に叩き付けられた。が、不思議と痛み

は感じなかった。

「ご、ゴメン望くん！」

「オーケー、痛くない」

そう言っただけ俺は立ち上がり、

「昇 拳！」

を放った。

「えっ、マジ！？」

楓は宙に舞い、落下して背中を打った。

「お返しだ」

「やったわね！？」

飛び起きて襲い掛かる楓。

「どわっ！」

俺は楓の飛び蹴りをもろに受け、吹っ飛んだ。「カウンターだ！」

体勢を立て直した俺は飛び蹴りを放った。

「キャッ！」

楓は吹っ飛び、空中で角度を変えて着地。

「なかなかだよ、望くん」

それから俺達のバトルは数時間程続いた。そして、決着が着かず夜を迎えた。

「引き分けだね」

と、床に倒れ込む楓と俺。

「だな。しかし、この戦いは何の意味も無いと思うが？」

「確かに……でも楽しけりゃ良いじゃん」

俺達は笑った。

「またやろうね、望くん」

「いや、それは遠慮しとく」

「そっか……」

3日目(後書き)

楓帰るまで、後4日！

4 日目

4 日目。今日は姉貴が来ている。

「紹介するよ。境姉さんだ」

「初めまして、柊沢 楓です」

「……」

「あ、悪い。姉さん、無口なんだ」

「絶境」

俺は疑問符を浮かべた。

「お姉さんの名前、糸色 境だから絶境。因みに望くんは絶望ね」
ピキッ！ 姉さんの堪忍袋の緒が切れた。

「柊沢 楓とか言ったかしら？ 喧嘩売ってんのかっ、ああ!？」

そう言っつて姉さんは楓の胸倉を掴んだ。

「あの、放して下さい」

「ウツセーッ、ぶっ殺すぞ！」

絶境が絶叫した。

「まあ、怖い」

「姉さん、やめてくれないか？」

しかし姉貴は言う事を聞かない。

「てか放さないと殺すよ？」

「貴様に何が出来る？ 言っておくが、私は……!？」

姉貴の腹に楓の蹴りが決まった。

「痛い……」

そう言っつて、姉貴は楓を放り投げて泣き出した。

「泣かした、楓が姉さん泣かした」

「なっ、何この罪悪感……?」

「いくら楓でも姉さん泣かすのは許せない！」

怒った俺は楓に喧嘩を吹っ掛けた。が、返り討ちにされ、ボロボロに成ってしまった。

「望くん、喧嘩する時はもつと冷静にならなきゃやられるだけだよ？」

しかし、ダメージの所為か、俺は返事が出来ない。俺は力を振り絞り、楓の下へ匍匐し、腕に掴まって立ち上がった。

「ま・・・ただ」

と、俺は楓の胸を掴んだ。刹那、楓は頬を赤く染め、全身の力が抜けて仰向けに倒れ、俺もその上に倒れ込んだ。

「のっ、望くん卑怯だよ！」

「相手の弱点を突くのが卑怯なのか？」

俺はそう言っただけで揉み始めた。

「イヤッ、ヤメテ！降参するから！」

俺は楓の上から退いた。だがそれはこいつの作戦で、

「なんて言うと思ったか！？」

楓は俺の股間を蹴り飛ばした。

「うおおーっ！」

俺は悲鳴をあげ、あそこを押さえた。

「痛っ、何しやがるんだ！？」

「相手の弱点突いて何が悪いのかしら？」

クソッ、やはり壁は超えられ無えのか！？」

「望くん、痛い？」

「くっ、俺の負けだ」

「やったあ、望くん勝ちだあ！」

「嬉しいか？」

「嬉しい。だって昨日は互角の勝負で引き分けに為っちゃったもん」

「そう言えばそうだったな・・・」

「それよりまだ痛いのか？」

「痛い、痛い。これは男にしか解らん」

「ふうん。体験してみようかな？」

「どうやって？」

「こっするの」

楓がそう言うと、肉体から彼女の魂　霊体が抜け出した。そしてそれは俺に近付き、俺の体と重なるが、直ぐに抜けて元の体になつた。

「痛い、物凄く痛い。耐えられない」

楓はそう言つて涙目に成る。

「今のは一体？」

「体外離脱・・・知らない？」

「幽体離脱か？」

「そうとも・・・言う・・・」

「どうでも良いが、言葉が途切れてるぞ？」

「痛いん・・・だよ」

そう言つて股間を押さえる楓。

「憑依中に感じた刺激は・・・霊体に一時記憶され・・・肉体に入つた時に・・・刺激として現れるの・・・。ごめん・・・こんなに痛いなんて・・・知らなかった・・・」

「大丈夫か？」

「無理・・・かも・・・」

楓は痛みに耐え切れず気絶した。

一方、姉貴は未だに泣いている。

4日目(後書き)

残り3日

5日目

5日目の朝、俺は寝坊してしまった。

「何で起こしてくれなかつたんだよ!？」

と、俺はリビングで平日の朝にやっている幼稚なアニメを観ている楓に訊ねた。

「五月蠅い、黙れ」

………忘れていた。楓はアニメを観ている時は誰とも口を聞きたがらないのだ。

俺はテレビの前に行き、主電源をオフにした。

ゴン! 楓の投げたテレビのリモコンが俺の頭に当たった。

「痛っ、物投げるなっ、物!」

「望くんが消すからいけないんだよ!」

「消される様な態度を取るお前も悪い」

楓は俯いた。

「一寸来い」

俺は警戒もせず、楓の下に行った。

すると楓は顔を上げてニヤリと笑って立ち上がり、俺の腹に拳をお見舞いした。

「ぐはっ!」

俺は勢いよく吹っ飛び、テレビにぶつかってそれを破砕した。

「痛。俺お前に何かしたか?」

「何度も起こしたのに起きなかった」

楓は俺を睨んだ。

「ごめん……」

俺は取り敢えず謝った。楓の御機嫌が斜めだったから。

「早く支度して頂戴。学校行くわ。まあ、今から行っても1限は間に合わないでしょうけど」

俺はふと時計を見た。短針は9、長針は6を指していた。

「うん、一寸待ってて」

「解った。じゃあ先に外出てるね」

楓はそう言つてソファに置いてあるスクールバッグを取つて家を出た。

俺は2階に上り、支度を済ませて外に出た。

「望くんっ、遅い！」

プクツと膨れる楓。怒られてしまった。

「先輩、お早う御座います！」

その声と共に俺にゾッコンの白川 聡美が現れた。

「出てくるのずっと待ってましたよ！」

その言葉に楓は振り向き、白川に眼を飛ばした。

「何ですか先輩？」

と、睨み返す白川。

俺はそんな二人をよそにドアを施錠して「置いて行くぞ」と、二人の横を通過して学校に向かった。

学校に着くと、俺達三人は校門の前にいた教師に捕まった。

「お前達、今何時だと思ってるんだ!？」

教師は時計を見ると、

「もう10時だ!トックに2限始まつてるぞ！」

その時、楓が教師を睨んだ。

「何だその顔は!?!文句でもあるのか!?!」

「五月蠅えんだよ糞教師」

楓はそう言つて教師を蹴り飛ばした。

教師は数メートル程地面を転がった。

「ちよっ、今のは拙ますいんじゃない?」

「良いの良いの。それより早く教室に行こう?」

楓は俺を見てニッコリと笑った。

やれやれ。

俺は片手を額に当てた。

「ほら、何してるの?」

「うお!？」

楓は俺の手を取り、校舎に駆けた。

「先輩、待って下さい!」

と、白川が後を追う。

放課後、俺と楓は教室で補習をしていた。

「むむむ・・・」

楓が課題用紙を睨みながら唸り声を上げた。

「楓、どうした?」

「よくぞ聞いてくれた!実は答えが解らないのだよ」

楓がそう言って課題用紙を俺の前に置いた。

無回答だった。

言い忘れていたが、楓はバカの固まりだ。全教科の試験点数は0点。小中高のテストで1点以上の点数を採った事が無い(本人談)。そんなんでよく高校を合格したな。一体どんな手を使ったのだから、疑問符。

「望くん、これやってくれない?一生のお願い!」

楓が手を組んで頭を下げた。

「一生つてお前、もう死んでるだろ」

「じゃあ、一死?のお願い」

やれやれ。

俺は楓の補習課題に手を付けた。

どうして俺は楓にあまいんだろう、疑問符。

ガラガラ、トン 扉が開き、「先輩、一緒に帰りましょう!」と

白川が入って来た。

「悪いな白川、今補習やってるんだ」

「えっ、どうしてですか?」

「遅刻したからだ。それよりお前はやったのか?」

「私は、やってないのです」

白川はそう言ってニパツと笑った。

「何故やってないんだ？」

その問いに白川は「面倒だからです」と答える。

「望くん、手が止まってる」

「あつ、悪い悪い」

俺は慌てて楓の補習課題を再開する。

「あの、所で先輩は、何故お隣の方のを？」

「何でだろうね」

「何でつて、やってるからには理由があるんじゃない？・・・？」

「無いよ。てか何でやってるのが解らない」

そんな事を言ってる間に、楓の分の課題が終わってしまった。

「ほらよ」

俺は楓に用紙を渡すと、自分のをチャチャツとやって終わらせた。

さて、帰り際に職員室に寄って行くこう。

俺は席を立ち、帰り支度をして教室を跡にし、職員室に向かった。

「待って望くん、置いて行かないで」

「先輩、待って下さい」

と、二人が俺を追い掛けて来て横に並んだ。

両手に花とはこの事を言っただろうな。

「ねえ、望くん？」

「何だ？」

「帰ったら何して遊ぶ？」

楓が俺に訊ねると、白川が俺を左側に移動させた。

「駄目です！先輩は私と遊ぶ約束してるんです！」

「何言ってるのよ!？」

今度は楓が俺を自分の右側に移動させた。

「望くんは私だけの物よ！誰にも渡さないから！」

お互いの目から細い光線が出てバチバチと火花を散らせる。

「否、俺は誰の物でも無いし」

すると楓は俺の唇に人差し指を置いた。

「命令よ。望くんは黙ってなさい」

俺は「はい」と返事をして口を閉ざした。

「白川さん？」

「何ですか？」

「明日の放課後、屋上で待ってるわ。望くんを賭けて決闘よ」

はぁ！？

「面白いですね。良いですね。その勝負受けて立ちましょう」

何乗ってんだよお前！？つか俺は戦隊物の人質か！？

こうして、俺を賭けて、楓と白川は、明日の放課後、決闘をする事に為った。

5日目(後書き)

楓帰還迄、後2日!

6日目（前編）

いきなり6日目の放課後、俺は屋上に置かれた一つの椅子に座らされ、拘束されていた。

目の前には楓と白川が睨み合う様に立っている。

「さあ掛かってらっしゃい。ポコポコにしてあげるわ」

楓はそう言っただけで白川を挑発した。

因みにやる種目はただのケンカだ。

「随分と余裕ですね。本気出さないと私には勝てませんよ？」

白川はそう言っただけで、シュインツと擬音を立てて消え、楓の後ろに出現した。

出た、白川の特技・高速移動。

じゆうくわいどう

この技は、1秒間に足を100回動かす事に因り加速機能を発動した某ライダーと同じ速さで移動する事が出来る移動方法である。その動きはハイスピードカメラで撮影しない限り絶対に認識する事が出来ない。

「消えた!？」

楓が驚いた顔で辺りを見回す。

後ろだ! そう叫びたいが、俺の口はテープで塞がれている為に声を出す事が出来ない。

「こっちです」

楓はその声の方を振り向いた。

すると白川の回し蹴りが顔面に直撃し、楓は吹っ飛んでフェンスにぶつかった。

ダン! とフェンスが音を立てる。

白川って、楓より強いのか?

「強いよね、白川さん。あなたになら本気出しても良さそうだよ」
本気って、俺を殴る時は加減してたのか?

俺は全身が震え、鳥肌が立った。

怖えよ楓。

「私にケンカを売った事、後悔しないでよ」

楓はそう言つてDBの如く「はあ・・・！」と気を溜め始めた。辺りのコンクリやフェンスが破壊され、宙に浮かび上がる。

あなた何者ですか！？

「そんなコケ齧りで私がビビると思いですか？」

白川はそう言つて高速移動を發動して飛び蹴りを放った、が、楓に弾き飛ばされ、宙に舞った。

「どうして？」

「あなたの動きが遅すぎなのよ」

楓はそう言つとシュインツと消えて白川の真上に出現し、両手を組んで叩き付けた。

白川は真下に落下してコンクリを破壊し、下の教室の床に背中を打ち付けた。

何ですかこのバトルは！？ケンカの領域超えてますよ！

楓はコンクリに着地をすると、「手応え無いわね」と言つて俺の下へやつて来た。

「望くんは私の物。誰にも渡さない・・・」

楓はそう呟きながら俺の口からテープを剥がし、縄を解く。

はあ 俺は安堵の溜め息を吐いた。

やっと自由に為った。

「待つて下さいですわ・・・！」

刹那、下からコンクリを破壊して白川が現れた。

「先輩は私の物です！そうですよね！？」

「否、誰のでも無いです」

「やっぱり私の物じゃないですか」

「お前どう言つ耳してんだ！？」

「駄目よ。あなたは私に負けたの。これ以上私の望くんにつき纏わないで」

楓はそう言つて俺の腕を取った。

「駄目！」

と、白川が反対の腕を取る。

そして互いに、俺を引つ張る。

「いててててつ、腕が千切れる！放せ！」

俺はあまりの痛みに涙目に成ってしまった。

「あつ、ごめんなさい！」

白川は慌てて俺を放した。

その為、俺は楓にぶつかって倒れ、上に重なった。

何だこのプニプニする物は？

俺は顔を上げた。

楓の胸が目の前にある。

成る程、倒れた拍子に楓の胸に顔が埋まった訳だ。

「退いて」

楓が睨みながら言った。

俺は無意識に楓の胸に手を置き、立ち上がるつとす。

「何処触ってんのよ!？」

頬を赤らめた楓のビンタが俺の頬に迫る。

「一寸待て！」

だが時既に遅し。俺は楓の平手打ちを喰らい、吹っ飛んでフェン

スにぶつかった。

「不可抗力だつっの」

「知らないわよ！それよりどっちが勝ったの？」

「勝ったって何が？」

「腕引つ張った時よ。白川さん途中で放したでしょ？」

「白川かな」

何言っただ俺？

「やったー！」

白川は喜んで飛び跳ねた。

「何で白川さんなのよ!？あの綱引き、私の勝ちでしょ!？」

綱引き!？俺は運動会の種目用具ですか!？

「否、白川の勝ちだ」

「何で!？」

「白川が放した理由、お前に解るか？」

楓は首を数回、横に振った。

「俺、二人に引つ張られて痛いと言ったよな？」

首を縦に振る楓。

「白川は痛がる俺を心配して放したんだ」

「その通りなのです」

白川はニパツと笑った。

「だが、お前は放さなかった。つまりお前は俺の事を何とも思っ
ちやいねえんだ!」

すると楓は立ち上がり、俺を睨み付けた。

「酷い……。酷いよ望くん!」

楓はそう言つて、泣きながら去つて行つた。

あれ、一寸言い過ぎた？

俺は「一寸待て!」と追おうとするが、白川が俺の腕を掴んで止
めた。

「先輩の事、何とも思つて無い人なんて放っておきましょう。それ
より私と一緒に帰りませんか？」

楓の奴、帰つてれば良いんだが……。

「解つた。一緒に帰つてやるから校門で待つてろ」

俺はそう言つて教室に行き、帰り支度をして校門に向かった。

校門に着くと、既に支度を終えた白川がいた。

が、俺はスルーした。

「先輩、無視ですか？」

あー、ウゼエ。

「待つて下さいよ先輩」

白川が駆けて来て横に着いた。

そして徐に手を繋ぐ。

「なっ、何だよ!？」

俺は頬を赤らめ、キヨロキヨロと辺りを見回した。

「誤解されるだろ？」

「別に良いですよ。私、先輩の事好きですから」

はぁ・・・溜め息を吐く俺。

一人に為りたい。

一応言っておくが、俺は白川が苦手だ。

「どうしたんですか？」

俺が困った顔でいると、白川がそう訊ねた。

「何でも無い！」

「そうですか。所で、この後って用事ありますか？」

「用事？別に無いけど」

「じゃあこれから私ん家来ませんか？」

「行かない！」

「そつ、そんなぁ。私シヨックですう」

白川は涙目に成った。

「解った解った、行ってやるよ」

白川は涙を拭いて笑顔に成った。

「本当ですか！？」

6 日目（中編）

都内の何処かにある今にも崩れそうなボロアパートくずれそう葛麗荘。

白川 聡美はこのアパートに部屋を借りて住んでいる。

俺はそのボロアパートを一目見て口にした。

「まんまだな」

「そんな事言ったら管理人さんに失礼ですよ？」

「そうだな」

白川は俺の返事を聞くや否や、ボロアパートのロビーに入り、エレベーターのボタンを押して乗り込んだ。

俺も白川に続いてロビーに入り、エレベーターに乗り込んだ。

白川はそれを確認すると5階のボタンを押してドアを閉めるボタンを押した。

ドアが閉まり、エレベーターのカゴが上昇して5階で止まってドアが開く。

「こっち」と白川が俺の手を取ってエレベーターから降り、一番端っこの509の前に立った。

白川が鍵を取り出し、穴に差し込んで鍵をリリースする。

「先輩、お先にどうぞ」

と、白川が俺を促す。

そう言えば女の子の部屋って楓ん家以来だな。

ガチャ 白川がドアを閉めて施錠した。

「何で閉めんだ？」

俺が訊ねると白川は答えた。

「先輩、今日は帰しませんよ」

ニパツと微笑む白川。

俺は首を傾げて疑問符を浮かべた。

「さ、奥へ行って下さい」

白川はそう言って俺をリビング迄押す。

「ちよつ、押すなよ」

「じゃ、お茶煎れますので座って待って下さい」

俺の話しを聞きちゃいない彼女は、キッチンに入って行った。さて。

俺は近くのソファに腰掛けた。

同時に、白川が湯飲みを二つ、お盆に載せてやって来て俺の前のテーブルの一つ、自分の所に一つ置いてお盆を脇に避けた。

「あの、先輩に大事な話があるんです」

白川は真剣な眼差しで言った。

「大事な話し？」

頷く白川。

「あの、聞いても怒らないですか？」

「怒んねえよ、泣かれたら面倒だから」

「先輩酷い。まあ良いや。話したのは、その、柊沢先輩の事なんですが……」

「楓の事？」

「はい。その、柊沢さんがあの日亡くなられたの、本当は事故じゃないんです。計画的に行われた殺人だったんです」

何ですと？ 俺は目を丸くした。

「私が先輩の事、大好きなの知ってますよね？」

引いて良い？

「でも先輩には既に柊沢さんがいました」

で？

「だから、私は計画しました。邪魔な奴は消そう。そして先輩を私だけの物にしようって」

されたくないな。

「で、ある日、孝之先輩に相談したの。そしたら先輩、柊沢さんを殺すって言ってあの日、無免許で車運転して糸色先輩を庇って飛び出した柊沢さんを轢き殺したんです」

今白川は何と言った？ 楓は事故じゃなくて、轢き殺された？ それ

って殺人じゃん！

「それに、孝之先輩は柘沢さんに殺意を抱いてたから好都合だ、って・・・。あ、誤解してるかもしれないから言っておきますけど、私は殺せなんて言ってますからね」

孝之が殺意を？しかし何故？

「なあ、一つ気になるんだが、何故孝之は捕まらないんだ？」

「それは、彼の父が警察庁の長官だから・・・」
成る程、それだったら圧力掛けて事故として処理出来るな。

「白川、俺帰るわ」

俺はそう言つて席を外し、鞆を持って玄関に向かった。

すると白川が直ぐに追い掛けてきて、

「先輩、先刻言いましたよね？今日は帰さないって」

「はあ？」

俺は振り向いた。その先には包丁を持った白川が、笑みを浮かべていた。

「一步でも外へ出たらこれで刺しますよ？」

「そんな脅しが俺に通用すると思うか？つつかそれ、100均で手に入る刃先が引つ込む玩具だろ？」

俺はそう言つて白川はから包丁を奪取して刃先を柄に向かって押した。

刃先が引つ込んだ。

「ほらな。じゃ、帰るわ」

俺は玩具の包丁を白川に返しておさらばした。

楓の奴、どうしてる哉、疑問符。

俺は帰り道、ずっと楓の事だけを考えて家路に着いた。

「ただい・・・！？」

俺が自宅の玄関に入った瞬間、「遅い！どんだけ待たしてんだ！？」と、楓の飛び蹴りが飛来した。

「うわっ！」

俺は間一髪の所でかわした。

パソコン！ 楓が玄関のドアを破壊して外に飛び出した。

避けて正解だったな。「望くん、今まで何処ほつき歩いてたの？」

「ふうん。あたしなんかより他の女の子が良いんだ？」

そう言っつて不適に笑みながら引き攣らせ、徐に歩み寄る楓。

「一寸待て！落ち着け！」

俺は楓を宥めようとしたが、問答無用で殴り掛かって来た。

ガスン！ 楓の拳が俺の顔面にクリティカルヒットして顔面が内側へ潰れた。

「白川さんと何してた訳？」

「お話した」

「どんな？」

「お前が轢死した日の話した」

「へっ？」

楓が疑問符を浮かべ、拳を顔から退かした。

「私の？」

俺は頷いた。

「どつやら、あれは事故じゃないらしいんだ」

「どつ言つ事？」

「実は、孝之の奴が・・・」

俺は楓にあの日の事を洗いざらい話した。

「えっ、あいつが計画して私を殺したの！？しかも親が警察庁の長官で事故として処理した！？信じらんない！」

怒った楓は、外に出た。

「何処行くんだ？まさか、孝之に仕返に行くつもりじゃねえだろうな？」

「行くわよ！地獄に墮おつことしてやるんだから！」

楓はそう言っつて孝之の家に向かった。

楓を止めなきや。

俺は慌てて楓を追った。

6日目（後編）

楓を追い掛けて数分、俺たちは齊藤^{さいとう} 孝之の自宅に辿り着いた。彼の家は一軒家で、お袋さんと二人暮らし。親父さんは小さい頃に他界した。

「望くん、これから起こる事は他言無用よ」

言って楓は、斉藤家の敷地に進入を試みた。

「待て！」

と楓を捕縛する俺。

「望くん放して！」

「嫌だ！」

「放さないとあんたから先に殺すわよ!？」

その時、鞆を持った制服姿の孝之がやって来た。今帰りらしい。

「オースツ、人ん家の前で女の子とイチャイチャしている糸色くん」

拙い。何とかして此奴を何処かへやらなくては。

俺は孝之の方に顔を向け、逃げる様、必死放いて説得をした。

だがしかしである。孝之は俺の言う事を全く聞かず、不意に楓の前に出てそのまま斎藤家の敷地に入った。そこ迄は良い。問題は此処からなのだ。

足が自由になっている楓が、孝之に強力な不意打ちを繰り出した。背中に楓のメガトンキックを喰らった孝之は、ボキボキと背骨が砕けてしまった。

その場に崩れ落ちる孝之。その姿はとても惨めだ。

「痛え〜！」

テンポ遅いよ、孝之……。

「さて、トドメ刺しますか」

楓はそう言っ、俺の呪縛から抜け出し、孝之にトドメを刺そうとしたが、既の所で孝之のお袋さんが家から出て来た。

「一寸、うちの子に何やってるの?」

楓は舌打ちをして「何でも無いわよ」と作り笑顔で言った。

「嘘仰い！あなた今、孝之を虐めてたでしょ！？見てたわよ！」

（否、虐めてたんじゃなくて殺そうとしてたんだよ）
と内心突っ込む俺。

「ママ、この女に背骨砕かれた！」

孝之はマザコンだった。

「何ですって！？」

お袋さんは孝之の背中に手を置いた。

「あら大変！直ぐ救急車呼ばなくちゃ！」

言って立ち上がると、お袋さんは楓を睨み付けた。

「あんたうちの孝之に何の恨みがあるの！？」

「ふんっ、クソババアには関係無いわよ」

「キーッ、クソババアですって！？巫座戯んじやないわよクソ餓鬼が！」

その言葉に楓はピキッと怒りマークを額に出現させた。

「楓、落ち着け」

俺は楓を宥めるが、言う事を聞かない。

どうしたら良い、疑問符。

「どうやら死にたい様ね。良いわ、お望み通り地獄へ送ってあげる」

うわー拙い！楓が殺戮マシンに変貌した！こうなっては誰も手に負えない。例え俺でも。

楓は地面を蹴り、前に跳んでお袋さんの顔面に拳をヒットさせた。

「おぶっ！」

お袋さんは勢いよく吹っ飛び、ドアにぶつかって破壊し、廊下に横たわった。

「へっ、手応え無いわね」

「ママー！」

「五月蠅いわよ！」

楓は叫ぶ孝之の頭を掴んでコンクリに強打させた。

「うっ！」

孝之は白眼を剥いて気絶した。

このままじゃマジで拙いよ！孝之死んじやうよ！

「あ、あのさ、楓？もう十分なんじゃない哉？」

しかし楓は聞く耳を持たず、孝之に跨って彼の頭をボカス力殴る。

「いい加減にしる！」

俺は楓の項を掴み、思いつ切り引き寄せた。

楓は驚いて目を真ん丸にしている。

「望……くん？」

と楓は俺の方に顔を向けた。

「駄目だこんな事しちゃ」

「何で！？孝之はあたしを殺したんだよ！？仕返しして何が悪いの

！？」

「全てだ」

「全……て……？」

俺は頷いた。

「だからさ、こんな事はもうやめて帰ろう？」

楓は少し躊躇いがちに応える。

「望くんが言うなら、やめるわ」

ホッとした俺は、ふう、と安堵の溜め息。

「その代わり」

疑問符を浮かべる俺。

何か嫌な予感。

「望くんにはサンドバックになって貰うから」

「やっぱり？」

俺は「嫌だー！」と叫んでその場から逃げ出した。

「待ちなさいーい！」

と後ろから楓が物凄い形相で追い掛けて来る。

「死んでも待たねえ！」

俺は必死放いて追っ手から逃げる。

だがしかし、楓の速さからは逃れられる訳も無く、到頭俺は捕ま

ってしまった。

そして俺はサンドバツクにされ、全身に沢山の痣が出来、血まみれに成る迄殴られ続けた。

けど、不思議と嫌な気はしない。寧ろ気持良い。だって俺Mだもん、楓に対してだけ。

ビバツ、楓の暴力！

6 日目 (後編) (後書き)

楓帰還迄後1日！

7日目(前編)(前書き)

前回、孝之の親父は他界したと記述した記憶がある様な気がします
が、その親父は実父です。修正するの面倒なので此处で訂正して
おきます。

7日目（前編）

7日目の日曜日。遂に楓との別れの日である。

その日の朝、部屋で寝ていると、楓に乘し掛かられて目を覚ました。

「お早う」

と俺の眼前で笑む楓。

「・・・夜這いにしては一寸遅過ぎるのでは？」

からかってみると、楓の右平手打ちが俺の左頬にクリティカルヒットした。

「痛え！」

「望のバカ！」

「なっ、テメエ何呼び捨てしてんだよ!？」

「ええ?だつて、一度言ってみたかつたんだもん。それより、今日は何して遊ぶ?」

遊ぶ・・・。そうか、今日は最後日だったな。

「その前に退いてくれないか？」

「あ、ごめん」

と退く楓。

俺は起き上がり、ベッドから降りた。

こりゃ驚きだ。痣どころか傷一つ無え。一日で完治するとは、俺の体は凄え。

「じゃ、用足して顔洗って来るからな。そしたら出掛けよう」

「私温泉行きたい!」

「温泉!？」

うん 頷く楓。

温泉か。ヘッヘッヘッ。

俺は薄ら笑いを浮かべると、用を足しに行った。そして洗面所に移動して洗顔と歯磨きを済ませ、部屋へと戻った。

秩父の何処かにあるとある温泉。俺たちは其処そこに足を運んでいた。中に入ると、先ず右手に下足入れがあった。

俺たちは靴を脱いで下足入れに仕舞い、入り口から真っ直ぐ進んだ所にある受け付けの前へ行つた。

規定の料金を二人分払い、風呂セット一式を二人分レンタル。

「じゃ、暫くお別れだな」

言つて俺は男湯に向かつて歩き出す。が、1ミクロも前に進めない。

「あつちにしましょう?」

振り向くと、楓が俺の項を掴みながら、反対の手で混浴を指差していた。

「そ、そつちは混浴!」

「あら、駄目?」

「い、否、駄目じゃ・・・無いよ?」

「じゃあ決まり!」

言つて楓はそのままそつちへ歩き出した。

俺は素早く楓の横に並び、同時に混浴の脱衣所に入った。

「なあ楓、何で混浴?」

「一緒に入りたいたいから、だよ?」

言つて楓は微笑した。

頬を赤く染める俺。気付くと楓は既に服を脱いでいた。

「ほら、ボーツとしてないで早く脱ぐ!」

と楓が俺の身ぐるみを剥がして真まっ裸はらにした。そして俺の服を口ツカーに打ち込む。

畳めよバカ、と言つたら何されるか分からないのでやめておこう。

楓はタオルを一つ俺に渡すと、自分のを持って浴室に入室した。後から俺もそれに続いた。

中には俺たち二人以外、誰もいない。まるで貸し切りの様だ。

「望くん、背中流しっこしよう?。」

言って楓は颯爽とシャワーの下に向かう。

俺はふと思った。今日の楓、何だか大胆過ぎ。

7日目(後編)(前書き)

期待を裏切ってしつくり来ない最終話です。

7日目（後編）

体を洗い終わり、浴槽に入ろうとすると、天井が破壊されて何か
が落ちてきた。

その何かは、湯気の所為で解らないが、恐らく人であるのは間違
い無いだろう。

その人影は立ち上がると、俺の下にやって来た。
同時に正体がハッキリする。

その正体は柘沢 楓。つて、一寸待て！

楓は今、浴槽に入ってる筈じゃ……。

「どうしたの？」

楓？が首を傾げて俺に訊ねる。

「お前、楓なのか？」

俺のその問いに楓は「そうだよ」と即答する。

「じゃあ、あそこに居るのは？」

「あれは白川 聡美だよ」

「え、マジ？」

俺は騙されたと思いながら、浴槽に入ってる少女を確認しに行こ
うとした。が、楓が俺の腕を掴んで引き留める。

「望くんは私以外の女に近付いちゃ駄目」

「強制しないでくれる？」

「嫌だ」

「うおっ、こいつ楓じゃん！」

「あ、そ。で、何しに来たんだ？」

「望くんを誑かしたあの女に制裁を加えに」

「そう言つて楓は拳をポキポキ鳴らす。

「辞めないか、そう言つ事？」

「どうして？」

「一応、此処は公共の場だから、騒ぎを起こすと後々面倒だからな」

「私には関係無い」

楓、爆弾発言其の一。

「じゃ、そう言う事だから制裁加えてくるね」

「じゃってお前な・・・」

楓は俺に笑みを見せると、白川の下に移動した。

「一寸あなた！何、望くんを誑かしてるのよ!？」

「あら、これは柊沢さん。一体、何の御用で？」

「あなたを殺しに来たのよ」

「一寸待てー！」

俺は慌てて駆け、二人の間に入った。

「退いて、望くん」

「否、退かない。っーか殺すのは辞めような？」

「じゃあどうすれば良い？」

「何もするな。仲良くするんだ」

「却下」

楓はそう言うと、俺を横へ吹っ飛ばした。

「っっ」

俺は壁にぶつかって呻き声を上げる。

その直後、楓と白川の死闘が繰り広げられた。

「さあ、掛かってきて下さい。返り討ちにしてあげます」

「面白い。勝ったら望くんは返して貰うからね」

「良いですよ。まあ、あなたでは私に敵うはっ」

そこまで言った所で、楓の鉄拳が白川の顔面に埋ずまる。

白川は楓の手首を掴んで顔から退かす。

「不意打ちは卑怯よ」

言って白川が楓に足払いを掛けた。

楓はバランスを崩し、転んで水中に潜る。

白川は水中に居る楓の頭を掴み、顔が外に出ない様、押さえ付け
た。

「白川、そいつ多分死な無えぞ」

「そんな超人居ません。そもそも、人間、水中で呼吸が止まったら気絶して呼吸再開。肺に水が入って死亡です」

「否、それが無いんだよ。そいつ、もう死んでるから」とその時、楓が白川の体を蹴り上げて立ち上がった。

「誰が死んでるですって!？」

そう言っつて俺を睨む楓。

白川は空中で攻撃態勢に入り、楓目掛けて落下する。

楓はひらりと身をかまし、タイミングを計って落下して来た白川に回し蹴りを放った。

「キャツ！」

白川は悲鳴を上げて俺の下に飛来する。

「こつち蹴るなバカ！」

俺はそう言っつて咄嗟に蹴り返した。

「んっ!？」

驚いた楓が慌てて白川の体を蹴り飛ばす。

白川は放物線を描き、床に背中を叩き付けられる。

「がはっ！」

吐血する白川。

「白川！」

俺は白川の身を案じて側に近寄る。

白川は白眼を剥いて気絶していた。

こつ無防備だと、触りたい放題だな。

「触ったら殺すわよ」

俺の考えを読んでいた楓が近付いてきてそう言っつ。

「触る訳無いだろ!？」

俺はそう言いながら両手を前に出して振るっつ。

「嘘よ。触りたそうな顔してる」

「・・・嘘は吐けないね、俺」

「そんなに女の子の体が触りたければ、私のを触らせてあげるよ?」

「え、マジで?」

「うん。その代わりボコボコだけど」

「すみません。遠慮しときます」

「て言うか、それ仕舞ってくれる？」

楓はそう言っただけで俺の股間を指差す。

俺は楓に背を向け、脱衣所に移動して体を拭き、服を着てロビーに出た。

「お返しします」

と風呂セット一式を返却し、外に出る。

外では楓が待っていた。

「そう言えばお前、今日でお別れなんだっけ」

「うん」

「寂しくなるな」

「うん。でもまた戻ってくるから」

「否、もう来なくて良いよ。殴られなくて済むし」

ガスン！

楓は俺を殴って去って行く。

「待て待て。冗談だ」

と俺は後を追って楓を捕まえた。

「俺はさ、お前に殴られると快く感じるんだ」

「そっなの？じゃあもつと殴ってあげる」

「否、それはっ」

楓は俺が言おうとしたのを遮る様に殴る。

「うっ！」

楓のパンチが腹に決まった。

「最高。今度は顔だ」

「本気で行くよ」

ガスンツ！

楓の本気の拳が顔面に決まり、俺を倒した。

「どうお？気持良い？」

「おう、気持良い。今度は踏んで貰おうか」

「了解」

楓は高くジャンプし、腹の上に落下して来る。

「がはっ！」

俺は吐血した。

「ごめん、一寸強かった」

「か、構わんよ」

「そう。じゃあ次は？」

「跨がれ」

楓はM字開脚で跨った。

「で、どうすんの？」

「後は好きにしる」

「うん。じゃあ殺す」

「おう。って、それは駄目だ」

しかし、時既に遅し。楓の手が俺の首に伸びていた。

「一緒に、あの世に逝こう？」

言ってグッと首を閉める楓。

俺は呼吸が止まり、次第に苦しくなっていくてもがく。

楓が首から手を離した。

「やっぱ辞めた」

言って楓は立ち上がる。

「帰ろう、望くん？」

「あ、ああ」

俺は起き上がり、立って楓と共に帰路に着いた。

家に着き、中に入って冷蔵庫の前に来る。

「じゃ、帰るね」

「ああ」

楓は冷蔵庫を開け、中に入って扉を閉めた。

逝ったのか？

気になった俺は、冷蔵庫を開けてみた。

しかし、楓は居なかった。

「どうやって消えた!？」

俺は冷蔵庫を改めるが、怪しい物は見付からない。

「楓?」

呼んでみるが、返事は無い。

俺は冷蔵庫を閉め、その場を離れた。

その時、冷蔵庫が開き、中から楓が飛び出して来た。

俺は楓を巧くキャッチした。

「ただいま、望くん」

「迅えおかえりだな」

「何言ってるの?一年振りじゃん」

「時間の進み方が違うだけだ。俺はお前を見送ってから一分しか経ってねえ」

「マジで?良かったじゃん」

「ああ。で、今度は何時まで?」

「望くんが死ぬまでだよ」

「マジ!?やった!」

俺は大喜びで跳び上がった。

おしまいっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4609c/>

レンタルボディ

2010年10月8日15時36分発行